

都市計画と観光まちづくりの横断に向けて

——フランス・ナント市のアートプロジェクトを事例に

*Intersection of Urbanism and Tourism:
A Case Study on Art Projects and “urbanisme transitoire” in Nantes, France*

越智郁乃^[立教大学観光学部・助教]／川崎修良^{*}

OCHI, Ikuno

KAWASAKI, Nobuyoshi

*九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター・講師

Summary: Region municipalities in Japan are trying to promote their cities through “Tourism and Urbanism” (観光まちづくり), which focuses on “Tourism” and “Community Design” in isolation from each other. In France, urban regeneration is integrated with cultural projects, in which residents participate in the center stage through a method called “urbanisme transitoire” (transitory urbanism, 過渡期の都市計画).

This study illustrates how the city government departments works together to renew the city while mixing urban tourism and urbanism through the art festival “Le voyage à Nantes” in Nantes, France, and next draws implications for issues of “Tourism and Urbanism” in Japan.

Nantes city (Ville de Nantes) has implemented various cultural and artistic policies since the 1990s. In the 2000s, the redevelopment of Nantes and urban areas progressed, and in the 2010s, cultural and tourism policies were integrated. As Nantes city implements this approach of transitional Urbanism with several characteristics: 1) city development is not carried out through centralized planning, but the goals are renewed flexibly and fluidly with the intervention of the residents, 2) artists and municipalities not only discover the historical and cultural resources of the city, but are also urged to reinterpret and reuse urban spaces and traditions, and 3) with the involvement of NPOs and universities, the training of artists, their intermediaries and local governments are promoting a growing professionalization.

The concept of “urbanisme” in France considers the relationship between “urbanism”, “city planning” and “residents’ activities” as being fluid. By adopting a new concept such as “transitoire” to address the current challenges of the city, “urbanisme” enables multiple government departments and diverse professionals to work together and gain an overview of the city. Even in Japan, “tourism and urbanism” needs to be developed not only by having residents participate in attracting customers and economic activities, but also for individual actors and local governments to negotiate with each other and gradually re-conceptualize the regional image.

Key words: 都市観光(Urban Tourism), 観光まちづくり(Tourism and Urbanism), 芸術祭(Art festival),
アートプロジェクト(Art Projects), 過渡期の都市計画(urbanisme transitoire)

- I はじめに
- II 日本の「観光まちづくり」政策の課題
- III 「過渡期の都市計画(urbanisme transitoire)」
とナントの都市再生
- IV 芸術祭 Le Voyage à Nantes における部局横断
 - 1. 緑の線の変遷と部局横断, 市民との連携
 - 2. 連携団体の取り込みと協働
- V おわりに: アートプロジェクトから考える都
市の観光と開発

I—はじめに

本稿は、衰退した造船工業都市から文化芸術都市へのイメージ転換に成功したフランス国ナント市における芸術祭“Le voyage à Nantes(「ナントへの旅」, 以下「LVAN」と表記)”を事例に、都市観光と都市開発を関連させた部局横断的な取り組みによる新たな都市創造の手法について明らかにし、日本の「観光まちづくり」政策の課題につなげて考察することを目的とする。

現代の都市観光と都市開発は切り離せない。『観光学辞典』(1997)によると都市観光とは「一般に、観光対象には自然的なものではなく人工的なものが多く、したがって人工的観光対象立脚型観光地を形成し、またそれによって成立する」。また橋爪(2005)は「集客都市」のあり方について、観光戦略に応じて柔軟に地域のイメージを書き換えたシンガポールの再開発例を挙げながら、従来の産業政策だけではなく、さまざまな理由で地域の付加価値を高めていく総合的な部局横断的な政策として意味があると指摘する。後述するように、日本においては「観光まちづくり」という名の下で

都市開発がなされているが、「観光」開発と「まちづくり」の間の乖離が指摘されている。そこで本稿では、観光とまちづくりの側面を併せ持つアートプロジェクトに注目し、その乖離の解消に向けた方策を、都市計画と文化人類学的な視点から検討したい。

アートを通じて地域社会に働きかけるアートプロジェクトは、1990年代頃から都市に限らず日本各地に広がり始めた(熊倉2014)。アートプロジェクトには、自治体や財団が主催する規模の大きな芸術祭と一般に呼ばれる国際美術展から、コミュニティレベルでのプロジェクトまで様々な形態が存在する。現在では、越後妻有台地の芸術祭(新潟県十日町市・津南町)、横浜トリエンナーレ(横浜市)、あいちトリエンナーレ(愛知県)、瀬戸内国際芸術祭(香川県、岡山県)等、地域内外からのボランティアと数十万人の観客を動員する規模の芸術祭が全国各地で行われている。これらは、交流人口の増加への期待¹や、地域主体の文化芸術活動としての評価²など、社会において一定の意義が認められる取り組みになっている。しかしながら、開催自治体やメディアの評価は、イベントとしての集客数や経済効果、あるいは専門家による作品批評にとどまり、まちづくりとしての側面は見逃されてきた(越智2014, 2019)。近年、社会学を中心にアートプロジェクトに関する議論が深まる中で、瀬戸内国際芸術祭や越後妻有大地の芸術祭のように「成功した」と評価される芸術祭開催地における住民参与の在り方についての研究(宮本2018)もなされているが、観光や再開発との関連については言及されていない。

さて、このようなアートプロジェクトが一時的な集客や住民意識の変化といった視点を超えて、

都市開発や自治体の部局横断的な政策に影響を及ぼす視点を有しているかという点には疑問がある。一定規模の集客を実現するアートプロジェクトの主催自治体において、総合計画に芸術祭とその他の施策の関係を示す、あるいは都市計画や景観計画といった具体的な都市開発に関わる計画において芸術祭の影響を言及する例は極めて少ない⁴。これには人口規模にもよるが、住民の合意形成を図りながら大規模なアートプロジェクトを継続することの困難⁵や、自治体内の各部局でアートプロジェクトの継続的な実施を決定する権限を持つことが難しい⁶という問題も考えられ、これらも含めて課題として各開催自治体において検討する必要がある。

以上のような日本の状況を踏まえて本稿で取り上げるフランスのナント市は、1980年代以降、造船業から文化芸術による振興政策への転換を図ってきた。日本でも開催されている音楽祭“La Folle Journée (熱狂の日)”が誕生した地でもあり、日本各地の自治体からの視察も多く訪れている文化芸術都市の「お手本」である。ナント市は、中心市街地に隣接した旧造船工場エリアの再開発、観光客と住民の都市空間に対する認識を揺さぶることを企図した芸術祭LVANなど、多岐にわたる取り組みを行ってきた都市でもある。この取り組みによる影響はナントだけにとどまらない。現在フランスにおいて公的な都市開発に取り入れられつつある「過渡期の都市計画(urbanisme transitoire)」、すなわち都市開発の過渡期の段階に人々が参加するイベントを組み込む技法の成立に、ナント市での取り組みは関係している⁷。

以上を踏まえ、本稿ではLVANの取り組みを例にアートプロジェクトを基盤とした総合的な部局横断的な政策について考察を加えることで、2000年以降の芸術祭による日本の観光まちづくり、観光行政に関する議論への架橋を試みる。現地調査において、ナント市の都市開発と文化芸術、

観光に関する文献調査を行うとともに、自治体、芸術祭関係者、アーティスト、一般住民や観光客への聞き取り調査から一次資料を得て、考察を行った。

II——日本の「観光まちづくり」政策の課題

本節ではまず、「観光まちづくり」という言葉の用いられ方を手掛かりに、日本の都市観光と都市開発の関係の課題を整理する。

現在の国の見解として、2016年3月に国土交通省都市局都市政策課が作成した「観光まちづくりガイドライン」(以下「ガイドライン(2016)」)は「観光まちづくり」を以下のように定義している。

まちに根ざした創発人材(創造的なまちづくり活動と積極的な情報発信を行う人材や団体)が、上述の(自治体と連携の下、小さな経済活動の種が育ちやすい)土壌づくりに継続的に取り組んでいくことによって、遠くからも人が訪れ、小さな経済活動が活発化し、ひいては空き地や空き家などが活用されるなど、地域の活性化と生活の質の向上に資すること。

このガイドライン(2016)において「観光まちづくり」とは小さな経済活動を活発化させるための地域住民の活動と定義される。そこでは主体に行政を置くことは回避され、空き地や空き家など都市施設への言及はあるものの、経済が活発化することによる住民や民間の波及の結果に止まる。

1990年代後半から2000年代前半にかけて行われた国の観光振興に関する検討プロセスでは、「住民の役割」⁸に対する課題意識以外にも、都市空間の課題についても議論されている。例えば、地域社会と観光との関係が問われるようになった1990年代後半の時期(堀野2014)を経て、2000年代には都市開発と都市観光の関係が意識されるよ

うになった。2000年12月に提出された観光政策審議会の答申「21世紀初頭における観光振興方策～観光振興を国づくりの柱に～」(以下「審議会答申(2000)」)には、「観光まちづくり」を推進するための施策の一つとして「都市計画等の計画への『観光まちづくり』理念の反映」を行う必要性が記述されている。2000年代の観光立国の実現に向けた政府の取組の端緒となった「観光立国懇談会」の報告書(2003年4月提出。以下「懇談会報告書(2003)」)においても、「ニューヨーク、ロンドン、ベルリン、北京、上海、シンガポールなどの再開発への関心は高い」ことが指摘され、「その国のもつ空間が人々をひきつける価値があるか」を国としての魅力の一つとして言及している(「観光立国懇談会報告書一住んでよし、訪れてよしの国づくりー2003年4月24日観光立国懇談会」)。

しかしながら、同懇談会を参考に2007年に施行された「観光立国推進基本法」や2013年に策定された「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」には、都市再開発や都市計画への反映の視点は盛り込まれなかった⁹。他方、観光を視野に入れた都市開発の重要性は日本において意識されているものの、制度や政策に反映されているとは言い難い。このような視点で先のガイドライン(2016)における「観光まちづくり」の定義を見ると、行政が関与する「都市計画」の包含が回避されていることが確認できる。

ここで一般に「観光まちづくり」の用語が使われるようになった経緯を、「まちづくり」の用語の意味内容の変遷と合わせて確認しておきたい。卯月によると、「まちづくり」の用語の初出は1952年の雑誌「都市問題」における「町づくり」であり、住民による社会運動の意味合いが強い用語として使われていたという(卯月2019:15-16)。一般的に「まちづくり」が普及するのは1960年から70年代にかけてである。革新系首長がそれまでの国が定める国土計画や国中心の都市計画、都市開発ではなく、

地域独自の計画や開発を中心に地域が自ら進める都市づくりや地域主権主義を選挙公約で訴える中で用いられ、それが地方政治の争点となる。このようには「まちづくり」は、国の「都市計画」に対する反語として生まれた(卯月2019:16)。一方で、石原・西村はまちづくりの裾野の広がり指摘し、行政組織の中にまちづくりを冠した部局が設置される状況と、行政部局がその役割分担の範囲内でまちづくりを定義することで、まちづくりの意味の乱立に拍車がかかっていることを指摘する(石原・西村2010:37)。

「観光まちづくり」の用語についても、同様に行政用語的な側面が指摘できる。都市工学を研究する西村は「観光まちづくり」という用語が行政用語として生まれた端緒は、前述の観光政策審議会の前段階として行われた1998年の「まちづくり研究会」によって発表された「観光まちづくりガイドブック」¹⁰であることを示唆する¹¹(西村2009:21)。西村が主査を務めるまちづくり研究会をはじめとし、その後の審議会答申(2000)、懇談会報告書(2003)を経た観光立国推進基本法成立までの一連の動きからは、観光行政に「まちづくり」の用語が取り込まれる過程がみてとれる。

しかしながら、「地域環境の維持・向上運動」である「まちづくり」と「地域経済の推進活動」としての「観光」の間には軋轢が存在する。「摩擦を避けてむしろ距離をとってきた面が多い」ことや「まちづくりの典型的な活動家たちは観光という言葉が好きではない」ことを、西村自身が叙述している(西村2009:10)。また、似田貝ら(2008)は「まちづくりの百科事典」と題して「まちづくり」の関連用語の包括的な網羅を試みているが、その序文で示すまちづくりの展開の例示に「観光」は含まれていない¹²。しかしながら上述したように、観光行政における住民参画が課題になる過程で、もともと分離していた「観光」と「まちづくり」が一体的に語られるようになった。こうした状況に対して、「ま

ちづくり」を行う当事者も違和感を持っている。例えば、筆者らがこれまで調査を行ってきた新潟市の芸術祭においても「交流人口の拡大と地域活性化」を開催目標に掲げているが、市の助成金を得て商店街の空家活用アートプロジェクトを行う地域団体の代表者は「観光客を呼ぶためにこの活動を行っているわけではない」「この街が『死なない』ためにやっている」と強く主張する。

問題は、「観光まちづくり」が進められる過程で「まちづくり」の本来的意義の一つである国主導の「都市計画」に対するカウンターとしての側面が消失することにある。前述のように審議会答申(2000)では「計画への『観光まちづくり』理念の反映」が、懇談会報告書(2003)では「人々をひきつける価値がある空間」が課題として認識されていた。しかし、最終的に観光立国推進基本法の下で行われる「観光まちづくり」の定義においては、小規模経済活動の活発化への住民参加を促すに止まる。西村は「観光まちづくり」を「地域社会が主体となって地域環境を資源として活かすことによって地域経済の活性化を促すための活動の総体」(西村2009:11)と定義し、地域環境を資源として活かすことの先にある都市計画について含みを残しているが、直接的にこの課題を論じてはいない。

卯月は、「都市計画として進められてきた事業が地域住民のまちづくり計画と相容れない状況が生じるケースも実際少なくない」ことを上げ、「都市計画」と「まちづくり」の「ふたつが現在の日本に併存しているというのは、海外との比較から見ても極めて不自然な姿である」と指摘する。住民主導で観光まちづくりが進められた結果、それと異なる文脈で決定された「都市計画」が優位とされることが起こりうる日本の状況は、卯月の言うように「大変悲しい、また不幸なことである」(卯月2019:19)。このように都市観光と都市再開発との関係について議論が回避された上で、実際には住民に参加を求める「観光まちづくり」が進められて

いるのが日本の現状と言えるのではないか。

III——「過渡期の都市計画(urbanisme transitoire)」とナントの都市再生

では、本稿で事例として取り上げるフランスではどのような議論があるのだろうか。似田貝らは、「我が国における『まちづくり』の概念自体が時代とともに変化・発展」するため、「まちづくりの適当な英語の訳語を探すのは極めて困難」と前置きしたうえで、フランスにおいても「相当する言葉は存在」せず、1990年代以降「オーダー・メイドの都市計画」「より人間の顔をした都市計画」「対話の都市計画」など、穏和な機微の形容辞を「都市計画(urbanisme)」にともなわせる表現がみられると指摘する(似田貝他2008:223, 389)。

筆者らも研究を進める中で、日本で「まちづくり」として行政課題化された取り組みは、フランスでは「都市計画(urbanisme)」と認識され、制度的にも都市計画の問題として議論されていることが分かった。そして、フランスで現在注目されている手法として、都市再生を文化プロジェクトと融合させて、都市開発の過渡期の段階に人々が参加するイベントを組み込む「過渡期の都市計画(urbanisme transitoire)」¹³の技法に着目した。この技法は2010年頃から徐々に試みられるようになり、2018年には公的機関であるパリ地域研究所(l'Institut Paris Region)¹⁴がその概念を主に据えた実践書¹⁵を発行するなど、一般的に受け入れられつつある。文化芸術都市の創出を目指して都市開発を進めてきたナント市の取り組みはこの技法の萌芽段階の試みであり、ナント市の中心市街地に隣接するナント島(l'île de Nantes)の都市再開発を請け負うsamoa¹⁶が30年のナント島の開発の経緯を“urbanisme transitoire”¹⁷と題して振り返るなど、先行事例だという意識をナント自身も有している。

ナント市は、フランスでも前例のない文化芸術による都市政策を進めてきた都市である。歴史的

にはブルターニュ地方であったが、現在はアトランティック＝ロワール県の県庁所在地である。ロワール川沿いに位置し、18世紀の奴隷貿易による舟運業で急激に発展したこの都市は、1980年代に造船所が閉鎖された後、経済的に衰退した。80年代後半に市が経済発展の梃子として文化芸術を活用し、公共スペースでの大規模な芸術的イベントの開催を奨励した。この取り組みは以降のフランスの都市政策において参照され、リヨンやル・アーヴル等の都市で公共スペースを用いた芸術祭が開催されるようになった。¹⁸

Gangloff(2017)はナント市のジャン＝マルク・エローが市長であった30年間の取り組みを検証し、①芸術的イベントの増殖の段階、②制度化の段階、そして最終的には③住民のライフスタイルの中心に芸術を置くことによって都市を構想する、という3段階を経て都市政策が進化したと指摘する。

①の段階は、1984年から1999年間の文化開発研究センター(Centre de recherche pour le développement culturel : CRDC)による文化的イベントの増殖である。CRDCは、ナント市に隣接しナント郊外で人口規模が2番目に大きな自治体であるサン＝テルブラン(Saint-Herblain)に、当時は同市の市長であったエローによって設立され、後にLVANの芸術監督となるジャン・ブレーズがディレクターに就任した。CRDCは1986年から1995年にかけてサン＝テルブランでグルヌリ城(Château de la Gournerie)を活用した演劇祭Le festival de la Gournerieを、またエローのナント市市長就任後の1990年から1995年にかけてはナント市で芸術祭Les Alluméesを開催した。CRDCはこれらの芸術祭を通じて公共空間を表現の場として普及させた。Les Alluméesではナント市の中心街の他、旧造船業施設の遊休施設であった2,800㎡の旧製氷工場Le Fabrique de glaceが会場として選定され、その後ナントの象徴的な集客施設の一つになった。また、1989年には、エロー市長が

大道芸集団ロワイヤル・ド・リュクス(Royal de Luxe)を誘致し²¹、同集団による公共の道路を舞台にした劇場パレードLes spectaclesがナントの文化プログラムと連携して実施されるようになった。

②の段階は、1990年代後半から行われたCRDCを進化させるための議論を経て1999年に再開された文化施設Lieu Uniqueと、ロワイヤル・ド・リュクスから展開したマシン・ド・リル(Machines de l'île、「島の機械」)プロジェクト、そして政治主導で開催された芸術祭Estuaire(「河口」)の開始に向けた議論である。Lieu Uniqueは、1886年に建設され1986年に閉鎖された旧ビスケット工場である。1990年代初頭にはロワイヤル・ド・リュクスをはじめ、さまざまな文化団体がナント市から半ば公認される形で工場の広い空間を「文化的不法占拠(squat)」していた。この工場跡が1994年にLes Allumées祭を開催する会場としてCRDCに「発見」された。その後、ディレクターであるジャン・ブレーズによるナント市文化事業の提案をエロー市長が受け入れ、ナント市が1995年に買収し、CRDCが管理を委託されることで、旧ビスケット工場は現代アートの実験場として蘇った。

マシン・ド・リル・プロジェクトは、ロワイヤル・ド・リュクスのための巨大人形を創作していたラ・マシン(La Machine)の設立者で、元ロワイヤル・ド・リュクスの芸術監督であったFrançois Delarozièreと、屋外の都市空間でのイベント制作を得意とするアソシアション(NPO)マナウス(Manaus)の設立者で、元ロワイヤル・ド・リュクスのプロデューサーであったPierre Oreficeから提案された。ナント島の地域アイデンティティと世界的な評判を高めるために新しい公共アトラクションの提案は、当時検討が進められていたナント島西部の都市再生を支援するためのプロジェクトとして動き始める。2007年には旧造船所の敷地が大型の機械仕掛けのアトラクションを備えた都市公園として改装され、現在のナント島のシンボル



写真1 巨大象(Le Grand Éléphant)。象の鼻からは勢いよく水がまかれ、大人も子供も集まってくる(以下写真はすべて著者の撮影)。

とも言える機械仕掛けの巨大象(Le Grand Éléphant, 写真1)が設置された。造船所の遺構 Les Nefs Dubigeon(「デュビジョンの身廊」²⁴)は巨大象をはじめとした機械群の展示場と、ラ・マシンの機械を制作するアトリエになった。そこでは、ナント出身の作家ジュール・ヴェルヌの²⁵小説に登場する²⁶機械、ロワイヤル・ド・リュクス²⁷の都市演劇から生まれた機械仕掛けの人形、技術者の職場であった造船所など、ナントに所縁のある様々なものがモチーフになったマシンが観光客を楽しませる。

③の段階となる Estuaire は2000年代に、ロワールアトランティック県の2つの主要都市であるナント市とサン・ナゼール市が共通の地域政策を追求し、地域大都市圏の輪郭を描く政治プロジェクトの過程で実施された²⁷。2007年、2009年、2012²⁸年の3回開催され、両都市とその間にある12市町村を流れるロワール川の川岸に、その場所の自然・文化環境を反映して作成された現代アートが配置される、いわば「屋外美術館(un musée à ciel ouvert)」²⁹である(写真2)。この段階で都市プロジェクトに先駆けて文化プロジェクトを行う手法が意識されていたことは、過渡期の都市計画の概念の萌芽として特筆すべきである。

Estuaireでの実践を経て2011年に設立された³¹地方公共会社(société publique locale : SPL)が“Le



写真2-1 Estuaire クルーズ船内に掲示された作品一覧。



写真2-2 乗客はリバークルーズをしながら、船内DJによる沿岸地域の歴史・特産品の話聞き、川沿いの作品を観ることができる。

Voyage à Nantes(芸術祭と同名。以下「事務局」と表記)”である。

IV——芸術祭Le Voyage à Nantes における部局横断

芸術祭LVANに先駆けて、2011年1月にナント・メトロポール(ナント市を中心とした広域都市圏自治体)とナント市によって事務局が設立され、ナント・メトロポール観光局、ナント市主要観光地の管理機関³²、Estuaireの運営(恒久コレクションの維持管理を含む)機関が統合されることになる。その目的は芸術と文化を都市の中心に据えて地域の魅力を発展させることにあり、かつ関連事業の運営を一体化し戦略を共有することに

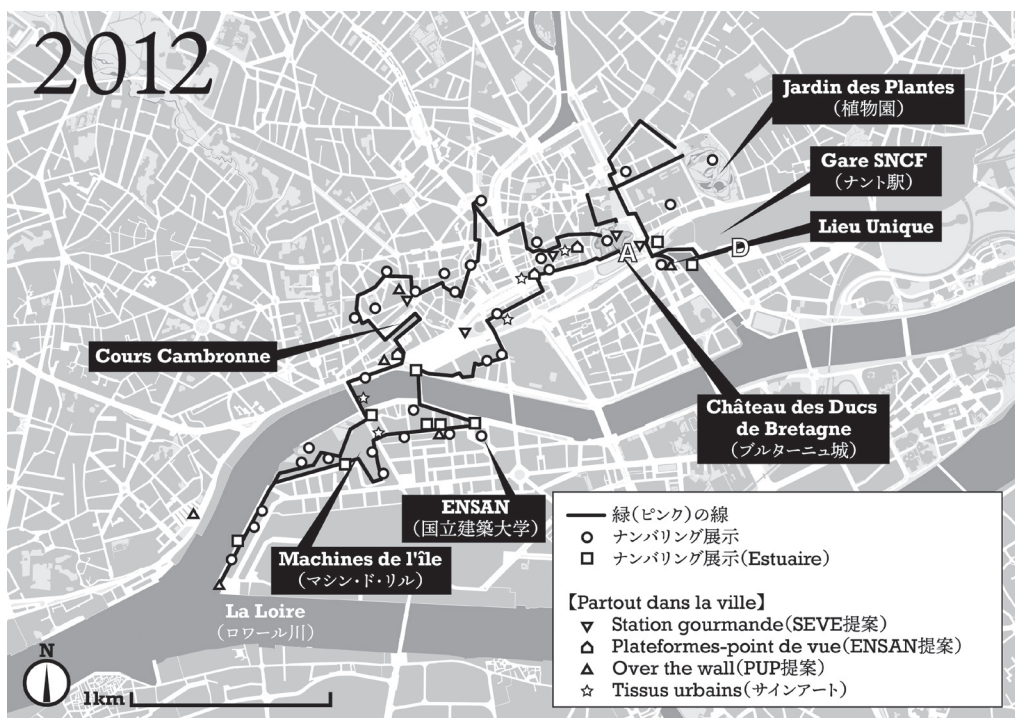
あった。³³ 事務局はナントを「突出した遺産に欠くが20年にわたる文化政策で特徴づけられた都市である」と認識している。³⁴ ゆえに文化遺産に焦点を当てるのではなく、他では見られないものを見られる都市としてユーロ圏にアイデンティティを発信することを意図して企画されたのがLVANである。³⁵

2012年から行われているLVANは、夏の約2ヶ月の期間開催される。ナントの中心市街地の多様な場所に、地元文化や場所の特性に因んだ現代アートが展示される。場所については、市内の様々な場所や出来事とアーティストをつなぐことを意図して事務局が決定し、作家を招聘する。³⁶ 展示は会期中の一時的なものであるが、市民の評価によっては継続的に残される作品もある。展示は路上に引かれた線（2012年は8.5km）でつながれ、Lieu Unique(地図①)、ブルターニュ城(地図②)、植物園(地図③)といった市の象徴的な施設、博物館、広場、歴史的な路地、現代建築、ロワール川岸の景勝地なども含めた散策コースが提示される。³⁷

開始初年の2012年、線の色はピンクであったが、2013年にナント市が欧州緑の首都(European green capital)³⁸に採択されたことを機に緑に塗り替えられた(以下、2012年についても便宜上「緑の線」と表記する)。LVANの芸術監督であるジャン・ブレーズによると、「緑の線は先験的には何の関係もない場所を全体として統一を図った⁴⁰もの、「必要とする観客のための便宜的なもの⁴¹」であったようだ。しかしながら経年的に見ていくと、芸術祭が継続される中で都市の変化や他部局の事業との連携が図られながら線が引かれる範囲が広がる様子が明らかになる。そこで本節では、公式パンフレットに記された緑の線の変遷を手がかりに、年度毎の展示の展開と他部局事業、市民団体との連携について考察を加える。

1. 緑の線の変遷と部局横断、市民との連携

2012年の緑の線(地図1)はナント駅から出発(Départの頭文字「D」が地図に記載)し、ナンバリ



地図1 2012年LVAN展示(パンフレットを元に筆者作成)



写真3 サインアート“Viva las Vegas! (ビバ・ラスベガス!)”。
中心市街地の商店の看板として街の店先に存在する。

ングされた展示(以下「ナンバリング展示」)を番号順に辿り、最終的にブルターニュ城に到着(Arrivéeの頭文字「A」が地図に記載する経路が示されている。線が途切れる場所や線から少し離れた場所の展示, また展示とは関係なく街路を迂回するようなルートも設定されている。このような迂回路は、歴史的建造物街区である Cours

Cambronne(2014年までは展示なし)⁴²や、ナンバリング展示とは別に会期中に設置される、ナント市内の団体や作家によるインスタレーション“Partout dans la ville(都市のあらゆる場所)”の設置地点を通るように設定されている。⁴³

Partout dans la villeには、ナント市緑地環境局(Service des Espaces Verts et de l'Environnement de la Mairie de Nantes, 以下SEVE)から提案された果物・野菜・ハーブ等を収穫できる菜園と食事のできる休憩所を組み合わせた“Stations gourmandes(グルメステーション)”, ナント国立建築大学(École nationale supérieure d'architecture de Nante, 以下ENSAN)の教員・生徒らから提案された都市の視点を変える3つの一時的な建造物“Plateformes-point de vue(視点のプラットフォーム)”, ナントを拠点に文化イベントを企画するアソシアシオン(NPO)“Pick Up Production(以下「PUP」と表記)”から提案されたビルの壁面にグラフィックアートを描く“Over the wall(壁面上)”な



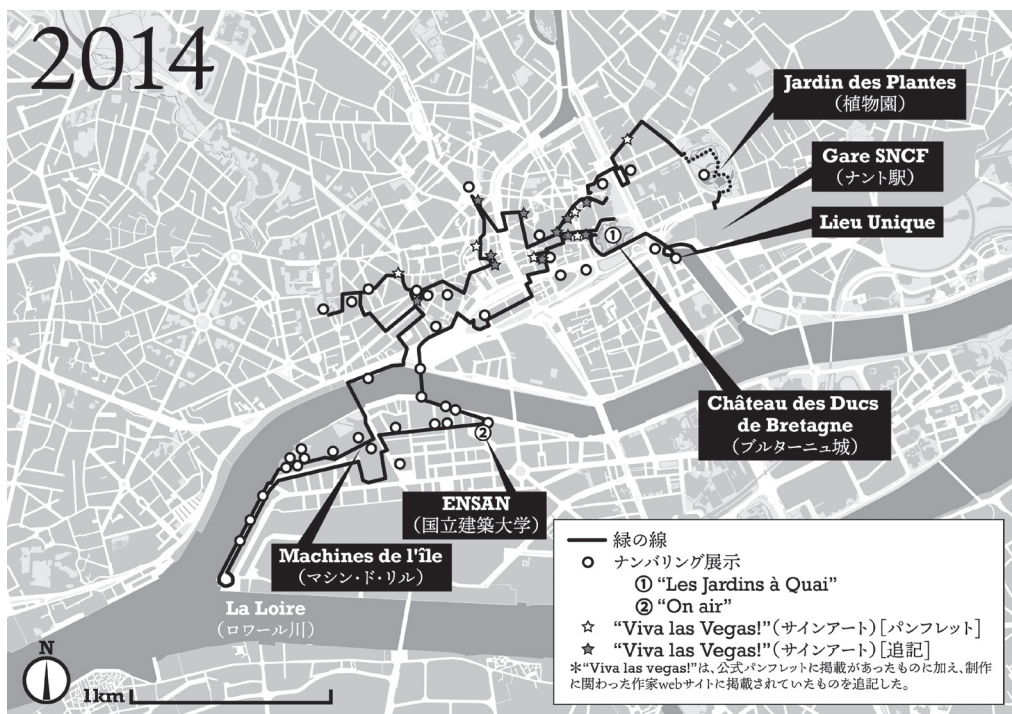
地図2 2013年LVAN 展示(パンフレットを元に筆者作成)

ど、地域団体から提案されたプログラムや、ナン
トで活躍するイラストレーターが住民の声を再解
釈した旗やペナントで街区を飾る“Tissus urbains
(都市の組織)”などの住民参加型アートが含まれ
る。うち、緑地環境局とPUPの企画は2013年
にはナンバリング展示に組み込まれる。また、
“Tissus urbains”のサインアートの取り組みは、商
店看板を再解釈して表現する2014年のインスタ
レーション“Viva las Vegas!(ビバ・ラスベガ
ス!)”(写真3)を経て、2015年以降はサインア
ートの意味そのものの“De l'art des enseignes(サイ
ンアート)”として定番化する。

2013年(地図2)は出発点と到着点がいずれもナ
ント駅になり、周回性が高まっている。中心市街
地を周る経路の他に、外側に向かう枝線
(branche)として緑の点線が引かれているが、枝
線沿いにナンバリング展示は配置されていない。
枝線が伸びているのは、同年1月にオープンした
現代美術の研究および実験センター Galerie

PARADISEのある Olivettes 地区(branche1), 2011
年に新たに Eric-Tabarly 橋が開通し再開発が進め
られていた Malakoff 地区(branche2), 川の上に植
物に覆われた群島を作る SEVE のプロジェクト
“Jardins à Quai(埠頭の庭)”が2013年6月にオー
プンした Ceineray 地区(branche3), 2013年6月
から緑地公園となり一般に開放された Oblates 公園
のある Chantenay 地区(branche4), 19世紀の邸宅
で2009年一般公開を経て2013年から定期的に展
示会が行われるようになった⁴⁴ la galerie melanieRio
のある Guist'hau 地区(branche5)の5地区である。
いずれも近年に新たな文化施設が登場したエリア
で、パンフレットにもその施設や展示説明にその
点が言及されている(後の2016年には Ceineray
地区、2019年には Chantenay 地区に緑の線が伸
び、ナンバリング展示が設置される)。

2014年(地図3)は、枝線はなくなるが
branche の用語は残り、Malakoff 地区(branche1),
Ceineray 地区に隣接する Île-de-Versailles 地区
(branche2),



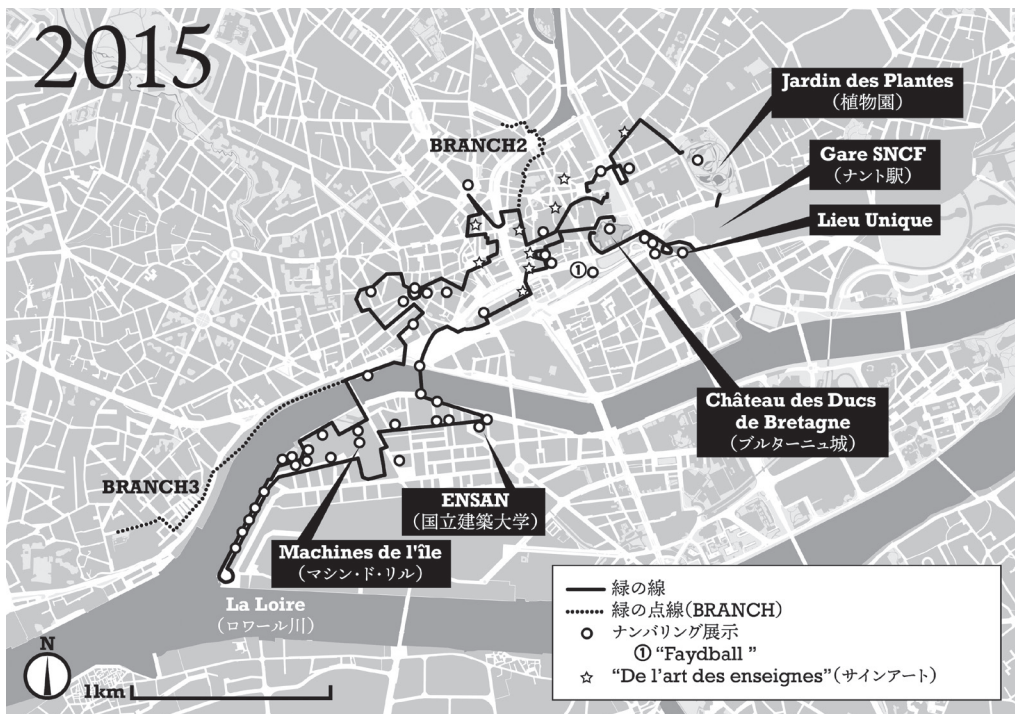
地図3 2014年LVAN展示(パンフレットを元に筆者作成)

Chantenay 地区 (branche3) の3地区については、独立した地図と紹介が掲載されている。前述したサインアート“Viva las Vegas!”は、公式パンフレット掲載の地図には緑の線上に6箇所示されているが、実際は19店舗のファサードに設置されたようである。⁴⁵ LVANの期間終了後も残されるサインも多く、これはこの年以降のサインアートプロジェクトも同様である。すなわち、緑の線に沿って地元アーティストによる作品が継続展示されるようになった。

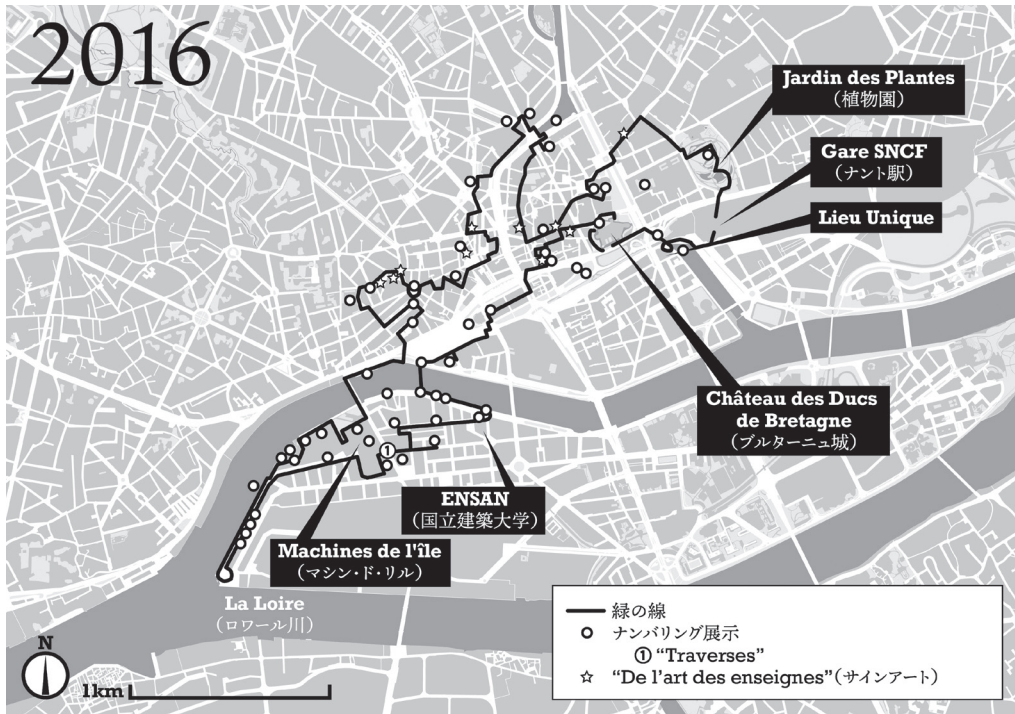
2015年(地図4)は、枝線 (branche) としての緑の点線が復活する。Malakoff 地区 (branche1) は地図の記載のみで枝線 (緑の点線) は引かれていない。Île-de-Versailles 地区 (branche2)、Chantenay 地区 (branche3) には枝線が引かれている。ロワール川南岸の Rezé 地区 (branche4) は、2014年はbrancheとしてではなく単に場所の紹介であったが2015年はbranche扱いとなる (緑の点線ではなく青の点線で船でのアクセスが示される)。

2016年(地図5)は、緑の線が Ceineray 地区まで拡張され、同地区にナンバリング展示が配置される。brancheの表現は無くなるが、Malakoff 地区、Rezé 地区、Chantenay 地区については継続して独立した地図と紹介が掲載されている。

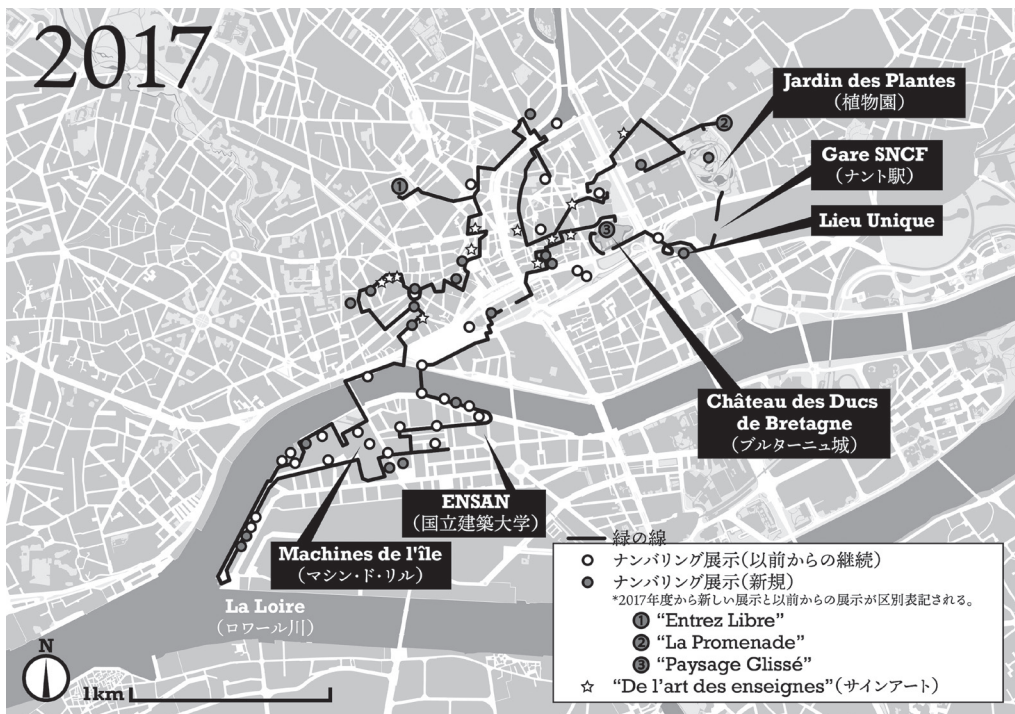
2017年(地図6)は、緑の線の経路は前年とほとんど変わっていないが、新たなアートへの短い支線が2つ追加される。一つは前述のPUPが実施した“Entrez Libre (入場無料)” (地図6: ①) である。これは2012年に廃止された刑務所遺構 Dreffé de la Maison d'arrêt の壁面等を利用したグラフィックアートの企画で、同施設を2015年にナント・メトロポールが買収し、2016年に12月に再開の方針が決定した。写真記録を残す過程で2014年11月のイベントでグラフィックアーティストが壁面に残したアートが発見され、芸術祭に“Entrez Libre”の展示が提案される背景となった。⁴⁷ もう一つはラ・ブテイユリ墓地 Cimetière la Bouteillerie で実施された“La Promenade (散策路)” (地図6: ②) で



地図4 2015年LVAN 展示(パンフレットを元に筆者作成)



地図5 2016年LVAN展示(パンフレットを元に筆者作成)



地図6 2017年LVAN展示(パンフレットを元に筆者作成)

ある。これはナント在住のアーティスト Gaëlle le Guillou が設立者の一人であるアソシアシオン (NPO) Big Bang Mémorial による葬送と墓地について考える市民参加型のプロジェクトがベースになり、芸術祭の企画として取り入れられた(写真4)⁴⁸。

2018年(地図7)は、緑の線がサン・フェリックス運河に伸び、土手から水路に張り出す木造のテラスのような実験的な建築インスタレーション“Intermède(中間)”(地図7: ①)が展示される。ちなみにナント市は、同年8月に運河の再開発計画を発表している。

2019年(地図8)は、緑の線が Île-de-Versailles 地区と Chantenay 地区に伸びる。Chantenay 地区については、崖から張り出すツバメの巣のような展望台“Belvédère de l’Hermitage(エルミタージュの展望台)”⁴⁹(地図8: ①, 写真5)がナンバリング展示として設置されたが、これは同年9月に公開された採石場跡地を再開発した緑地公園 Jardin Extraordinaire(驚異の庭)を含む「7つの展望台(les sept Belvédères)」の一つでもあり、他の5つの展望台と合わせて「7つの展望台のある散歩道(Promenade des sept Belvédères)」として象徴的な場所が生まれるように企画されている。これらの開発はナントメトロポール開発局(Nantes Métropole

Aménagement)のプロジェクトである。この展示のキュレーションには、ジュール・ヴェルヌ博物館(Musée Jules Verne)と住居地区間の美観が整えられていない場所にアーティスト・川俣正の作品を介入させることで、景観の問題の解決を図る意図が含まれていた。⁵¹

以上の緑の線の変遷から明らかになるのは、LVANの対象となるエリアや展示が流動的に捉えられていることである。芸術祭が開始された当初は緑の線は便宜的なもので、市街地各所の展示をつなぐものに過ぎなかったが、継続する中でLVANの象徴的な存在に変化していく。2013年には事務局がアレンジした展示の範囲を超えて、周辺地域の再開発スポットに誘導する視点が加わり(地図2)、これらのスポットの一部は後に緑の線が引かれ展示エリアに組み込まれていく(地図8など)。また、緑の線沿いでサインアート企画が継続的に実施され、作品が会期後も残されることから、線そのものが場所的な意味を持つようになったとも考えられる。

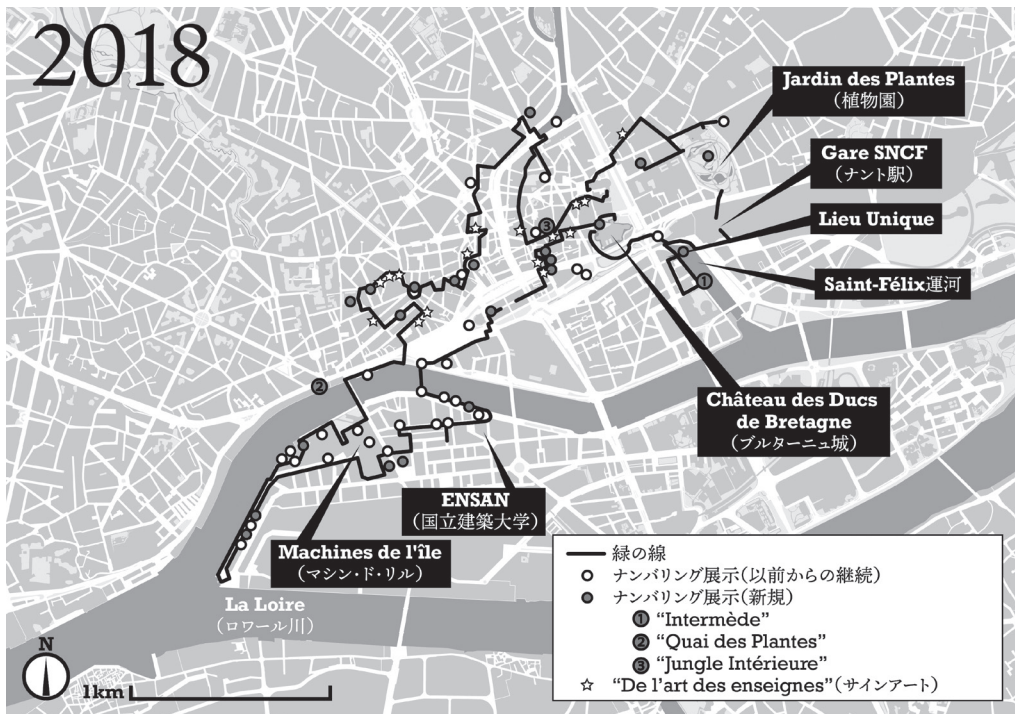
また、市民や他の行政機関との連携に関しても変化がみられる。事務局はLVANに地元アーティストを積極的に起用していなかったが、⁵²2017年には“La Promenade”や後述するように2018年には“Jungle Intérieure(屋内ジャングル)”等、地元アーティストらが長年関与していた活動場所が作



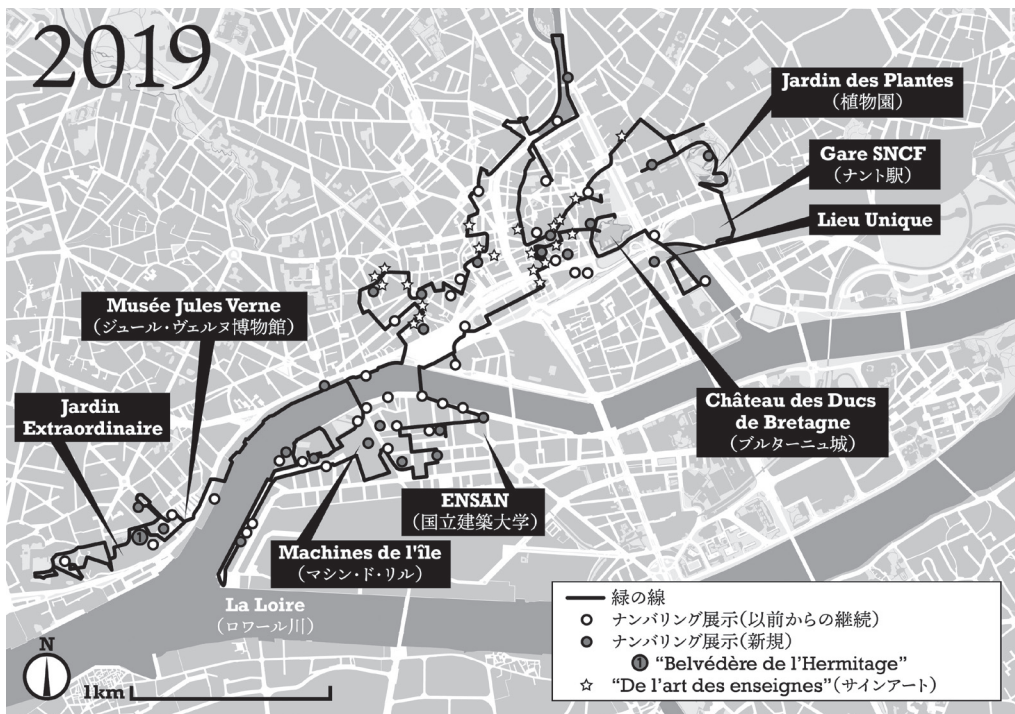
写真4 “La Promenade(散策路)”。墳墓に供えられた陶器の花の作品。



写真5：“Belvédère de l’Hermitage(エルミタージュの展望台)”。崖から張り出すように木製の展望台が設置された。



地図7 2018年LVAN展示(パンフレットを元に筆者作成)



地図8 2019年LVAN展示(パンフレットを元に筆者作成)

品として事務局に見いだされ、ナンバリング展示に加えられた。2018年・2019年には都市再開発や緑地政策と連動して、緑の線と展示の範囲が拡大されている。このように、文化芸術と観光行政の一形態であるLVANのプログラムには、地域アーティストの動向や他部局の都市政策の動向を通じて柔軟に変更が加えられている。

2. 連携団体の取り込みと協働

LVANには事務局以外の団体から提案等が行われた展示作品も取り込まれている。公式パンフレットには「提案(proposition)」「作成及び編成(cr  e et organis  e)」「連携(collaboration)」「設計と実装(con  u et mis en   uvre)」等と分類され、団体(もしくは個人)と展示作品との関係が記載されている

(表参照)。このような他団体の展示への関わり方の変遷からも事務局と他部局・他団体の協力関係の深化について窺うことができる。前述したように、2012年度はSEVE, PUP, ENSANなどの団体からの提案企画はナンバリング展示ではなく、別枠の企画としてスタートした。2013年にはこのうちSEVE, PUPの提案企画がナンバリング展示に組み込まれる。

SEVEは2013年度以降も、自身の管理する緑地やプロジェクトに関連する展示の提案を積極的かつ継続的に行なっている。

前述の“Station gourmandes”, 2013年に完成しbrancheに登場した運河沿いの緑地“Les Jardins    Quai”(地図2), 2014年と2015年にブルターニュ城を取り巻く濠の緑地に配置されたPatrick

表 LVAN公式パンフレットに記載された、地域団体が提案等を行なった企画
2012年度

展示名 (アーティスト名)	場所	提案者等	ナンバリングの有無
Plateformes-points de vue	rue de l'Emery / all��e de la Tremperie / quai de la Fosse	Michel Bertroux, Francis Migu��t, Michel Dudon, enseignants �� ENSAN, de leurs ��tudiants, de ceux de l'��cole sup��rieure du bois de Nantes (proposition:提案)	無
Stations gourmandes	divers lieux dans la ville (市内のあちこち)	SEVE (提案)	無
Over the wall : histoires de graffiti	divers lieux dans la ville (市内のあちこち)	PUP, du collectif Plus de Couleurs (提案)	無
La cuisine de kinya (Kinya Maruyama)	Jardin des Plantes	*提案団体等の記載なし	有

2013年度

展示名 (アーティスト名)	場所	提案者等	ナンバリングの有無
Des stations gourmandes en ville	Station Duchesse Anne	SEVE (提案)	有
Mim��tisme ou imitation l'avis des plantes (Claude Ponti)	Jardin des Plantes	SEVE (提案)	有
Les jardins �� quai	quai Ceineray	SEVE (提案)	無 (brancheとして掲載)
Histoire d'un mur	cours Franklin-Roosevelt	PUP (cr��e et organis��e:作成及び編成)	有
Sanagare (Observorium)	boulevard de la Prairie-au-Duc	samoa (提案)	有

2014年度

展示名 (アーティスト名)	場所	提案者等	ナンバリングの有無
Des stations gourmandes en ville	Station Duchesse Anne	SEVE (提案)	有
M��tamorphose ou re-cr��ation l'avis des plantes (Claude Ponti)	Jardin des Plantes	*提案団体等の記載なし (SEVE?)	有
Patrick Dougherty	Ch��teau des Ducs de Bretagne	SEVE (提案)	有
Villa ocupada	la Mutualit�� (rue D��sir��-Colombe)	PUP (作成及び編成)	有
On air	ENSAN	des ��tudiants du master solid thinking de l'ENSAN (提案)	有

Doughertyによる蔦の作品“Fit for a Queen(女王様にぴったり)”(地図3:①)は管理する緑地での展示である。2018年から実施されている“Quai des Plantes(植栽埠頭)”(地図7:②, 写真6)はSEVEが導入した移動式のプランターを用いてロワール川岸に一時的な緑地を出現させ、そこで保育園や屋

台の他、様々なアーティストの活動の場を提供するなど、自分たちの有する資源を活用してLVANに積極的に関与するようになった。

SEVEの管理である植物園(Jardin des Plantes, 写真7)については2012年から作品展示が行われているが、2013年からは植物園のプロジェクトにも

2015年度

展示名(アーティスト名)	場所	提案者等	ナンバリングの有無
Des stations gourmandes en ville	Station Duchesse Anne	SEVE(提案)	有
Le jardin déjanté (Claude Ponti)	Jardin des Plantes	*提案団体等の記載なし(SEVE?)	有
Fit for a queen	Château des ducs de Bretagne	SEVE(提案)	有
Asie Riderz	Canal Saint-férix	PUP(作成及び編成)	有
Musée nomade	passage Sainte-Croix, Temple du Gout, Maison régionale de l'architecture des Pays de la Loire, Muséum d'Histoire Naturelle	musée des beaux-arts de nantes(提案)	有
Les chaloupes	Médiathèque Jacques-Demy	Bibliothèque municipale(提案)	有
Enseigne	quai des Antilles (HUNGAR30)	MilleFeuilles(提案)	有

2016年度

展示名(アーティスト名)	場所	提案者等	ナンバリングの有無
Des stations gourmandes en ville	square Daviais	SEVE(提案)	有
Le jardin kadupo (Claude Ponti)	Jardin des Plantes	SEVE(提案)	有
Grafikama (service peinture)	rue des Pénitentes	PUP(作成及び編成)	有
Musée nomade	passage Sainte-Croix, Temple du Gout, l'Atelier	Musée des Beaux-Arts de Nantes(提案)	有
Les chaloupes pour lire au gré du temps	Médiathèque Jacques-Demy	Bibliothèque municipale(提案)	有

2017年度

展示名(アーティスト名)	場所	提案者等	ナンバリングの有無
Stations gourmandes	square Daviais	SEVE(提案)	有
Des stations gourmandes en ville (Claude Ponti)	Jardin des Plantes	SEVE(提案)	有
Zoulou ut pictura poesis (Pedro)	Jardin des Plantes	SEVE(提案)	有
Entrez Libre	greffe de la maison d'arrêt (rue Descartes)	PUP(作成及び編成)	有
Trafic	quai Marquis-d'Aiguillon	PUP(collaboration:連携)	有

2018年度

展示名(アーティスト名)	場所	提案者等	ナンバリングの有無
Les stations gourmandes	Square Daviais	SEVE(提案)	有
Quai des plantes	Quai de la Fosse	SEVE(提案)	有
Attraction (Johan le Guillerm)	Jardin des Plantes	SEVE(提案)	有
Jungle Intérieure (evor)	passage Boushaud	SEVE(連携)	有
Transflet	Site des Anciens Abattoirs (Rezé)	PUP(conçu et mis en œuvre:設計と実装)	無(ナンバリング展示と同じ覧に掲載されているが、ナンバリングはなく、緑の線から離れたルゼ地区に記載)

2019年度

展示名(アーティスト名)	場所	提案者等	ナンバリングの有無
Les stations gourmandes	Square Daviais	SEVE(提案)	有
Quai des plantes	Quai de la Fosse	SEVE(提案)	有
Attraction (Johan le Guillerm)	Jardin des Plantes	SEVE(提案)	有
Jungle Intérieure (evor)	Passage Boushaud	SEVE(連携)	有
Transflet	Rezé	PUP(設計と実装)	無(Les RDV art de la métropole:メトロポールによるアートとの出会いとして掲載)

「SEVEの提案」という記載が入る(2014年2015年には記載はないが、2013年・2016年と同じ作家 Claude Pontiの作品であるため、同じくSEVEの提案と推察される)。植物園に作品を提供した2012年の作家は、2007年のEstuaireの段階から継続的に作品を提供している丸山欣也であるため、初年度については事務局が作家をアレンジし、翌年からSEVEの提案に移行したと考えられる。

またSEVEとアーティストによるユニークな連携としては、2018年から登場した“Jungle Intérieure(屋内ジャングル)”(地図7:③, 写真8)がある。これはナント在住のアーティストである evorが、10年以上にわたって彼のアパートメント



写真6 “Quai des Plantes(植栽埠頭)”。巨大プランターで作る緑のプロムナード。途中にはカフェやイベントスペースもある。



写真7 植物園(Jardin des Plantes)はナントの観光名所であり、市民の憩いの場。写真の子供用プレイグラウンドにある巨大な鉢は、子供たちが入って遊ぶことができる。



写真8-1 “Jungle Intérieure(屋内ジャングル)”。アーティスト evorの「庭」がナンバリング作品になり、現在は緑地環境局のサポートで植栽する。冬場は大半が枯れるため、夏のLNAN会期中がまさに見頃である。



写真8-2 “Jungle Intérieure(屋内ジャングル)”を見るために、LVANが設置した階段。

の共有空間で独自に植栽し続けた「庭」である。evorの家を訪れたジャン・ブレーズがそれを発見したことを機に、「庭」を一望できる展望台と階段が設置され、ナンバリング展示に組み込まれた。作品にはナントに自生する植物の種や苗が用いられている。それらはアーティストの希望に応じて植物園から提供されるため、パンフレットの展示説明にもSEVEとの連携であることが記されている。

PUPは2012年の“Over the wall”を手始めに、2017年までグラフィティアートを核として様々なアーティストが参加するプログラムを展示してきた。前述した2017年の“Entrez Libre”は芸術祭終了後に再開で取り壊される刑務所遺構の壁面をグラフィティアートのキャンパスにする取り組みで、会期中に約94,000人がそこを訪れた⁵³。2018年はPUPが設計と実装を行う Rezé地区の旧食肉処理場跡地(Site des Anciens Abattoirs)のプロジェクト“Transfelt(転移)”が関連企画として記載されている。同地区では2023年から2032年にかけて6,000世帯の住宅建築が可能な600,000㎡の再開発 Pirmil-Les Isles 計画が予定されている。それに先駆けて、2018年から2022年にかけて文化芸術プログラムを通して将来の都市像にアプローチする「過渡期の都市計画」としてナント・メトロポールに採択されたのが“Transfelt”である⁵⁴。毎年夏に大きな公共広場を作成し、バー、レストラン、プレイエリア、参加型ワークショップ用の集合スペースなどが設置される(写真9)。Transfeltは初年度の2018年にLVANの展示として開始時期を合わせるなど連携を図ったようだが、2019年は独立性が強まる⁵⁵。

samoaは2013年に“Sanagare”(地図2:①)の展示をLVANに提案している。“Sanagare”はナント市の欧州緑の首都の一環として実施された企画 Percours Green Island(緑の島の通り道)⁵⁶における、実験的プロジェクトの一つである。2013年6月15日から9月28日にかけて展示されたこの企画は、ナント島の様々な場所12箇所に設けられたステーショ



写真9 “Transfelt(転移)”会場入り口。サーカスのような空間が広がる。

ンにそれぞれアソシオンや、建築家、造園家、芸術家、学生などのグループが実験的プロジェクトを実施した。LVANはナント島の西側のみがその経路に設定されているが、Percours Green Islandでは島全体を巡るような構成であった。そのうちLVANに組み込まれた“Sanagare”は招待作家によるものだが、その他のプロジェクトは公募によって選ばれ、そのほとんどはsamoaによってサポートされ、住民の参加も含まれる(Gangloff 2017)。“Sanagare”は次の30年のナント島の再開発において新たに建設される病院・大型公園とロワール川の関係性をイメージさせることを意図した展示である。作家であるObservatoriumは、2012年のEstuaireでナント島に作品を展示した際にPercours Green Islandの準備をしていたsamoaと出会い、翌年のプロジェクトに参加することになった(Gangloff 2017)。

国立建築大学(ENASAN)は、2012年と2014年に学生が関わる形の提案を行っている。2012年の“Plateformes-point de vue”(地図1)は市街地の路地や街路樹に一時的な建築や彫刻を設置することで都市の視点を変える展示、2014年の“On air(上映中)”(地図3:②)は車でアクセスできるENASANの建物の屋上を車社会のアメリカのドライブインシアターに見立てた屋外映画館で、現代建築に対す

る新たな視点を提起する展示がそれぞれ行われた。
これらの他団体とLVANへの関わり方から明らかになるのは、LVANの手法が緑地管理・開発部局(SEVE)、都市開発を担うSPL(samoa)、地域で文化活動を担うNPO(PUP)等の活動に影響を与えるということである。このように同地では文化芸術・観光行政であるLVANのプログラムを通して「過渡期の都市計画」の考え方の共有が進んでいる。

V——おわりに:アートプロジェクトから考える都市の観光と開発

以上のナント市における事例を踏まえ、地域の多様なアクターが参加するアートプロジェクトの側面から「観光まちづくり」の課題について考察する。

まず、フランスにおける「過渡期の都市計画」とは、都市開発における具体的な目標のためにプロジェクトを編成するのではなく、その過渡期においてアクターの参加を促し、そこから求められる都市のあり方を模索することを意味する。そこでは横断的、潜在的な要素の発掘、多様な実践、参加者、手法などを「結果的に模索していた」のではなく、「模索することが前提」とされている⁵⁸。特にナントでは1990年代からの文化芸術に関する様々な政策と実践を土台に、2010年代には文化政策と観光政策を一体的に運営する手法で「過渡期の都市計画」が進行している。芸術祭などのプロジェクトを展開させながら進める部局横断型の取り組みは、「観光まちづくり」と「都市計画」の一体化を回避し、並列したままで地域再生を目指す日本においても参照すべき試みではないだろうか。

次に、LVANの取り組みの変遷から分かる「過渡期の都市計画」の特徴として、以下の3点が挙がる。

①流動性:完成イメージを持たず流動的であること

緑の線を例に挙げると、その線は芸術祭にとって便宜的なものとして導入されたアイデアである。固定的でないが故に、市街地の変化や芸術祭に呼

応して市民団体や他部局がプロジェクトを行う中で、線もまた変化している。また、事務局は原則として事務局が選んだ場所に対して適切な作家をアレンジするため、地元作家の起用を積極的に行っているわけではない。しかし地元作家の活動が展示としてふさわしいと判断した場合は芸術祭に取り入れるなど、状況に応じて柔軟なキュレーションを行っている。

柔軟性から得られる効果として、その作品を通じた他部局との連携や介入があることも重要である。例えば、上述した“Belvédère de l’Hermitage(エルミタージュの展望台)”は、住宅地区とジュール・ヴェルヌ博物館周辺の「つまらない」景観の場所に設置されたが、その後メトロポール開発局のプロジェクトに組み込まれ、事務局以外の部局も巻き込みながら現在も景観の課題と向き合っている。

また、2015年の展示“Faydball(フェイドボール)”⁵⁹(写真10)も同じく景観の課題に介入した作品である。この展示は広場に配された歪んだサッカーフィールドで、観客は大きな逆円錐形の鏡を通して見ることで長方形のサッカーのゲームが浮かび上がる。この地域で「子どもの遊び場を作る」というのがナント市の課題であったが、後ろにある建物が「美しくない」ため、これを大通りから覆い隠す形で作品が設計された経緯がある。完成当



写真10 “Faydball(フェイドボール)”。銀色のオブジェに映るサッカーフィールド。天気の良い日は大人も子供もここで遊ぶため、作品の人気度が測りやすい。



写真11 “traverses(横断歩道)”. マシン・ド・リルの前にある曲線の横断歩道。

初は一時的な展示であったが、市民から高く評価され、市長が継続的に展示することを決定した。⁶⁰

さらに、マシン・ド・リルに続くLéon Bureau通り上の作品“traverses(横断歩道)”(写真11)は、真っ直ぐな白い線ではなく、曲線が交差しながら道をつなぐ横断歩道である。これは、ナント島を横断する大通りの自動車の流れを遅くしたいsamoaの課題を基に作られた。⁶¹ 道路を整備するメトロポールのプロジェクトが先にあり、特定のアーティストを入れて展示を検討する事務局の提案がメトロポールに受け入れられ、このような展示が成立した。

②資源の再解釈：資源の発見に加えて再解釈が行なわれていること

ナントはEUの主要観光都市と比較して突出した遺産に欠くという認識の下、文化遺産ではなく、他では見られない「文化」を見せることに主眼を置くという事務局の方針が芸術祭に反映されている。例えば、上述した“Jungle Intérieure(屋内ジャングル)”は、それまで特に都市の遺産としては何も認識されていなかった場所で起こっていたアーティストの活動が展示に取り込まれた例である。また、2017年の展示“Paysage Glissé(滑走する風景)”も好例である(写真12)。これはブルターニュ



写真12 “Paysage Glissé(滑走する風景)”. ブルターニュ城に取り付けられた滑り台から、普段は見ることがない城壁や風景を見ながら滑走する。会期中には行列ができることもしばしばある。

城の城壁に設置された高さ12メートル、長さ50メートルの滑り台で、滑りながら普段はみることができない視点で城の構成要素、中庭、市街地などを見ることを意図した作品である。⁶² 1466年に再建された城は文化省指定の歴史的建造物(monument historique)であるが、展示では城の歴史性ではなく、現在の風景や市街地との関係に力点を置いている。つまり、歴史的な遺産に観光客を誘導するのではなく、住民も含めてその場所を再解釈させる視点が作品に現れている。このような視点は、ナント市でかつて栄えた造船場の遺構に、機械製作を行うアーティスト集団ラ・マシンのアトリエを配置したナント島の開発でも見いだせる(写真13)。

③新たな職能育成：奉仕者ではなく新たな職能家を育成していること

アーティストだけではなく、その仲介者の職能化が進められていることが重要である。2012年から始まったPUPのの関わり方が好例である。音楽、ダンス、ストリートアート等のヒップホップ文化に由来するイベントや展示会を得意としていたPUPは、グラフィックアーティストをコーディネートする形でLVANに参加し、展示の場を



写真13 造船場の遺構を再利用したアーティスト集団のラ・マシンのアトリエ。

広げた。そして、2018年には得意分野を活用しつつ、公的な過渡期の都市計画プロジェクト Transfert を自ら提案し、請け負うに至る。

またナント島に位置する国立建築大学(ENSAN)は、2012年、2014年とLVANの作品提案にも関わる。ENSANでは、建築、都市、風景などが劇場や映画と共通するという考えに基づいたセノグラフィ(scénographie)教育を1999年から導入している⁶³。演劇由来の技法であるセノグラフィの概念は、ロワイヤル・ド・リュクスの都市演劇や、文化プログラムをイベントと組み合わせたブレーズの取り組み、ナント島の再開発など、ナントにおける様々な取り組みを通じて、都市を空間と時間の混合体として捉えてデザインする「都市のセノグラフィ(scénographie urbaine)」としての技法化が進められている(Gangloff 2017)。ENSANのセノグラフィ部門の設立者である Freydefont(2012)は、一般的には作品やイベントの表現を促すための敏感な空間を設計する技術として定義されているセノグラフィの技術について、都市などの他の領域に適用することも関連する職業と捉え、セノグラフィ分野の建築学位(DPEA)が都市のセノグラフィ(ストリートシアター)scénographie urbaine [théâtre de rue]の分野で役立つことができると述べている。また、パリ地域研究所は、過渡期の都

市計画のサイトを活性化させることは一時的な職業の重要な要素であるとし、活性化に役立つスキルと経歴の一つにセノグラフィを挙げている⁶⁴。このようにナントの文化政策やLVANのプログラムが、都市に関連する新たな職能を作り出すことにつながっている。

以上のLVANの特徴として挙げた3点は、日本において「観光まちづくりガイドライン(2016)」に示されていない具体的な手法と考えることができる。特にアートプロジェクトによる観光政策を進める自治体には、示唆に富んだ実践である。これらの特徴3点のもたらす効果については、Gangloff(2017)の次の言が適切に表現しているのではないか。

LVANの作品は開発プロジェクトの付随物として位置付けられ、作家が場所をつくることによって都市の利用者による予期しない仲介者を誘発する。この仲介者により、文化的事業者は都市プロジェクトのやり方を変更し、公共空間の開発プロジェクトにおける全員の立場を更新することができる(Gangloff 2017:357)。

ナント市での実践は官主導でありつつも、市民の自発的な都市開発への参加を促すことが目論まれており、その仲介役としてアーティストや新しい職能者が活躍している。彼女は仲介者としてのセノグラフィ、あるいはセノグラフィの視点を持ったプロデューサーの有用性をここで指摘しているが、筆者はこれをアートプロジェクト全体への示唆であると捉える。とりわけ日本の芸術祭をはじめとするアートプロジェクトでも、アーティストやボランティアなどその土地で強く関与することを可能にする様々なアクターが生まれ、育ちつつある。自治体はそれらのアクターをプロジェ

クト助成金の使用者とだけみなしていたのでは、何度回を重ねようとも、その都度単発のイベントに終わってしまうだろう。

そして最後に、ナントにおいて観光政策や文化政策の取り組みが部局横断的に成功している背景にある、都市の活動に対する包含的な概念としての“urbanisme”の効能について指摘したい。

日本の縦割り行政システムの中での「都市計画」は、都市の整備・開発およびそれに向けた利用の制限に収斂しがちである。他方フランスのurbanismeは専門家が主導する技術ではあるが、既存の都市や今後都市化する場所に対する包括的な対処法として、都市の「計画」以上の意味を包含する。そのうえで、urbanisme transitoire(過渡期の都市計画)は決定の前に時間の幅をもたせて利用者の動向を探ることで、都市空間の変化と人々の活動の関係まで含めた予測を試みる。似田貝ら(2008)が指摘したように新たな形容辞(transitoire)を加えることで、都市の動的な姿をイメージさせることに成功しているのだ。

“urbanisme”の適切な訳語がない日本では、本稿で見てきたような「過渡期の都市計画」の試みは

「都市計画」より「まちづくり」の領域として認識される傾向にある。しかしながら国の都市計画の反語として生まれ、住民の視点から裾野を広げてきた日本の「まちづくり」の概念に我々は期待を託している。

これまで摩擦を避けて距離をとってきた「観光」と「まちづくり」の関係性(西村2009)が、新たに模索されている。「観光まちづくり」において、既存の行政的・制度的慣習に譲歩した結果、単なる両者の共通する部分の取り組みにのみ留まったり、集客や経済活動にばかり住民を動員することは避けなければならない。都市計画や文化政策の領域にも踏み込み、個々のアクターと自治体、そしてガイドライン(2016)が言うところの創発人材の関わりから、徐々に地域像を描きなおす取り組みの展開が今、求められているのだ。

謝辞

本研究はJSPS科研費18K01198 基盤(C)「都市の記憶をめぐる創造と実践：芸術祭を通じた市民社会の形成に関する人類学的研究(代表：越智郁乃)」を得て実施した。ナント市調査でコーディネート・通訳を引き受けていただいた沼口久美子氏、高田祐輔氏にこの場を借りて御礼申し上げます。

注

- 『平成21年度国土交通白書第3節の2(1)』に「国土交通省の調査では、地域が将来にわたって活力を得ていくためには、地域の持ち前の良さや既存ストックを活かしたり、芸術祭の開催など地域参画型の取り組みを行ったりすることにより、人を呼び込むことが有効だと考えていることがうかがえる」との指摘がある。
- 2016年に文化庁が策定した「文化芸術立国中期プラン」では、「各地域が主体となり実績を積み重ねつつある文化芸術活動」として「ビエンナーレ、トリエンナーレ、芸術祭、展覧会などの開催」を例に挙げ、これを「世界に誇る日本各地の文化力」と評価している。
- 来場者数が5万人を超過以下の芸術祭における主催的自治体を参照した。瀬戸内国際芸術祭2019(104万人)、KENPOKU ART 2016茨城県北芸術祭(77万人)、六本木アートナイト2018(76万人)、新潟市水と土の芸術祭2018(71万人)、あいちトリエンナーレ2019(65万人)、さいたまトリエンナーレ2016(36万人)、ヨコハマトリエンナーレ2017(26万人)、岡

山芸術交流 2016 Okayama Art Summit 2016(23万人)、大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2018(21万人)、いちはらアート×ミックス2017(10万人)、逗子アートフェスティバル2017(7万人)、奥能登国際芸術祭2017(7万人)、やまがたビエンナーレ2016(6万人)、北アルプス国際芸術祭2017(5万人)。

- 例として、大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレの主催的自治体である十日町市は「イメージ的な大地の芸術祭の里ブランドを市の施策全般に浸透させていくことで、発信力の強いブランドを構築する」必要性を示しているほか、都市計画マスタープランにも芸術祭の役割と創出される現代アートの景観資源化の方針を明記している。珠洲市は2017年3月に策定した都市計画マスタープランに、2017年9月から開催した奥能登国際芸術祭の役割を記述している。
- 各年度において実施が検討されることが多いアートプロジェクトに対し、都市計画や景観計画は審議会の関与や住民縦覧の規定があるため住民の合意なしでの変更が難しく、計画の

- 中で言及することに対する躊躇があることが考えられる。例えば、逗子市は「景観計画」にアートフェスティバルに関する記載がないが、アートフェスティバルの開催を記した総合計画(逗子市総合計画実施計画 2015～2022)と同じ年限の「景観計画推進プラン(2017～2022)」(景観計画に掲げる基本目標を具現化するための事業プラン)には実施すべき普及啓発事業として「市民によるアートな景観創出」を記載している。
- 6 都道府県と市町村、複数の市町村など、複数の自治体が連携して実施している芸術祭の場合、都市計画行政や景観行政の主体のみでアートプロジェクトに関する意思決定が困難であるため、計画の中で言及することに対する躊躇があることが考えられる。
 - 7 ナントの影響を示す例として、2014年よりフランス文化省の主催する「公共空間の芸術と文化に関する国家任務」(Mission nationale pour l'art et la culture dans l'espace public)が開催された。このミッションの議長は1990年代からナント市の文化イベントを手がけ、2012年からLVANの芸術監督であるジャン・ブレイズが務めた。報告書では「芸術を都市の変化の中心に置くこと」等、公共空間と芸術の関係性についての考え方が提示された。
 - 8 1963年の「観光基本法」の改正法として2007年に施行された「観光立国推進基本法」では、新たに「住民の役割」が以下のように規定されている。「住民は、観光立国の意義に対する理解を深め、魅力ある観光地の形成に積極的な役割を果たすよう努めるものとする」(法第五条)
 - 9 観光立国推進基本法は観光立国に関する、基本理念、国および地方公共団体の責務、施策の基本事項などを定めた法律であり、同時期に策定された「景観法」には景観と観光の関係が記述されているが、1968年に策定された都市計画法には観光との関係の言及はない。観光資源の利用上の市街化調整区域に係る開発行為についてのみ言及されている(第34条の二)。川崎(2013)は、景観法は景観に対する基本法の成立自体が課題の中で策定された法律であり、「既存の法制度の隙間を縫って、制度的に追加できる部分を補う形で立法された」と指摘しているが、観光立国推進基本法についても同様に、都市計画法に抵触しない形で立法が行われた可能性が考えられる。
 - 10 運輸省運輸政策局観光部の主要メンバーと各界の学識経験者からなる観光まちづくり研究会(主査・西村幸夫)が1998年頃から検討を開始し、2000年3月に「観光まちづくりガイドブック-地域づくりの新しい考え方〜『観光まちづくり』実践のために」として発表している。これは当時議論が進められていた観光政策審議会としての最後の答申(直後に予定されていた省庁再編によって審議会も再編されるため)の柱の一つとして用意されたものであった(西村2009:21)。
 - 11 同ガイドブックはその冒頭において「観光まちづくり」という言葉が多くの人にとって聞きなれないものであることを認め、この「新しいまちづくりの考え方を少しでも多くの人たちに伝え、実際に取り組んでいただくことをめざして作った」と述べている(西村2009:3)。
 - 12 「まちづくりは、今や、密集住宅修復、環境、景観、歴史・文化、福祉、中心市街地の再生、地域雇用に至るまで多様に展開され[...], 全国的に展開している」(似田貝 他2008:xiii)。
- また、同事典に収録された用語のうち観光が頭に着く用語は1972年からの「観光資源保護調査活動」のみである。
- 13 フランスではこのような都市への一時的な介入について、“urbanisme transitoire”の他、“urbanisme temporaire”“urbanisme éphémère”といった用語がある。urbanisme transitoireは「移行の概念を強調するために好まれ、実行される開発とプロジェクトは、サイトの移行期間にわたって、将来の都市プロジェクトを視野に入れて実行される」。urbanisme temporaireは「暫定的な開発、または特定の期間にわたる職業プロジェクトを修飾でき、必ずしも事前に定義されているわけではないが、将来の都市プロジェクトに影響を与えることを意図していない」。urbanisme éphémèreはイベントのことを指し、主に公共空間で発生する建設やプロジェクトの非常に短い一時性を強調している(l'Institut d'Aménagement et d'Urbanisme de la région d'Île-de-France (2018) “L'Urbanisme transitoire” Les Carnet Pratique n° 9, p.5)。
 - 14 1960年にl'Institut d'aménagement et d'urbanisme de la Région parisienne (IAURP)として設立され、1976年よりl'Institut d'aménagement et d'urbanisme de la région d'Île-de-France (IAURIF)、2019年から現在の名称。
 - 15 l'Institut d'Aménagement et d'Urbanisme de la région d'Île-de-France (2018) “L'Urbanisme transitoire” Les Carnet Pratique n° 9
 - 16 Societe d'Aménagement de la Metropole Ouest Atlantique.
 - 17 2019年9月にナントで実施されたメディア芸術祭 scopitoneにおいて、samoaはLes Allumées祭を始点とするナント島の30年間の一時的な都市計画を振り返る展示を行った(samoa公式webサイトより)。
 - 18 リオンでは19世紀に始まったFête des Lumièresを1999年以降、4日間にわたる光の祭典とし、通り、広場、象徴的な建物等のライティングにアーティストを参加させることで数百万人の来訪者を呼び寄せることに成功した。ル・アーヴルでは2017年に開港500年を祝うイベントとしてジャン・ブレイズを芸術監督に据え、公共スペースを展示空間とした芸術祭「ル・アーヴルの夏(Un Été au Havre)」を開催した。
 - 19 エローは1989年から2012年までナントの市長を務め、その後オランダ政権で首相になった。
 - 20 6年間にわたって実施された芸術祭で、ナント港と交易のある6つの主要外国港都市(1990年バルセロナ、1991年サンクトペテルブルク、1992年ブエノスアイレス、1993年ナポリ、1994年カイロ、1995年ハバナ)のアーティストが各年度にそれぞれ集められた。
 - 21 ロワイヤル・ド・リュクスは1979年南仏のエクサンプロヴァンスで設立され、1984年にトゥールーズへ移転した。その後、1989年にトゥールーズがロワイヤル・ド・リュクスに対する財政援助を認めなかったため、ロワイヤル・ド・リュクスは全国紙で訴えを行った。その年、新たにナントの市長に選出されたエローが助成金と格納庫の敷地の提供を約束し、10月にロワイヤル・ド・リュクスはナントへ移転した(Gangloff 2017)。
 - 22 ナント島の再開発のプロジェクトは1990年代に議論が始まり、1998年にチーム作りが開始されると、1999年12月に都市計画家 Alexandre Chemetoff と建築家 Jean-Louis Berthomieu の

- 二人が率いるグループが担当に選定された。その後、2000年11月には開発計画plan de développementが作成され、島の将来像と、近隣地区を繁栄させるために公共空道を再構成する方針が示された。
- 23 ラ・マシンのプレス2019 (file:///C:/Users/Ikuno%20OCHI/Downloads/DP-MACHINES_2019_GB_BD-1.pdf) より。
 - 24 かつてシャンティエ・デュビジョン(造船所)が所有していた建物で、構造(「身廊」)のみを残して改修された。
 - 25 ジュール・ヴェルヌ(1928-1905)。サイエンス・フィクション(SF)の開祖、SFの父とも呼ばれる。
 - 26 機械仕掛けの巨大象はヴェルヌの小説“La Maison à vapeur (邦訳『蒸気で動く家』荒原邦博・三枝大修訳、石橋正孝解説、インスクリプト、2017年)”に登場する象の形をした鋼鉄製蒸気機関車がモチーフになっている。
 - 27 Estuaireは、ナント-サンナゼール大都市圏の建設という政治的プロジェクトを支援し、訪問者に開かれたルートを構成することを趣旨として実施された(Estuaire公式webサイト <https://www.estuaire.info/fr/estuaire/> 参照)が、このような課題はナント-サンナゼール大都市圏の方針検討段階で検討されている。2000年12月13日のSRU法(都市の連帯と更新に関する法律 Loi relative à la solidarité et au renouvellement urbains)によって、フランスに自治体グループによって一貫性を目的として作成される地域計画Schéma de Cohérence Territoriale :SCOTの制度が導入され、2003年にナント-サンナゼール大都市圏のSCOTを作成するための自治体混合組合(以下「混合組合」)が設立される(混合組合の長にはナント市長であったエローが選出された)。混合組合設立から4年かけて2007年に策定されたSCOTにおいて、計画の強力な軸となるロワール河口に住民がアクセスしにくい状況が指摘されている(混合組合作成の”Scot.métropole - Rapport de présentation.1”。ナント-サンナゼール大都市圏センター(Nantes Saint-Nazaire pôle métropolitain)のwebサイト http://www.nantessaintnazaire.fr/wp-content/themes/polemetropolitain2015/publications/SCOT_2007_diagnostic.pdf参照)
 - 28 当初はビエンナーレとして2011年に開催が予定されていたが、2012年に開始されるLVANとの連携のため一年延期された。
 - 29 事務局公式サイトに記載。
 - 30 MasboungiはEstuaireが大都市圏の開発計画の与える影響について以下のように言及している。「開発に先駆けた文化的プロジェクトは、皆が関係を認識するためのシンボリックな基準を生み出すことでこれまで忘れられていた空間を見えるようにし、アイデンティティを作り出す力を持っています“Préalables à l'aménagement, les projets culturels ont le pouvoir d'instituer, en le révélant, un espace jusque-là oublié, de fabriquer de l'identité en élaborant une référence symbolique à laquelle tout le monde peut se rattacher et s'identifier”(Masboungi 2012:52)」。
 - 31 2010年に法制度化された、資本が地域コミュニティによって独占的に所有される公開有限会社。
 - 32 la Sem Nantes Culture et Patrimoine。プルターニュ公爵城、マシン・ド・リル等を管理していた。
 - 33 事務局作成の記者会見資料(2011年1月20日)https://www.levoyageanantes.fr/pdf/VAN_dossierdepresse_janvier2011.pdf 参照。
 - 34 前掲33
 - 35 事務局プロジェクトリーダーへの聞き取り調査(2019年3月)より。
 - 36 事務局プロジェクトリーダーへの聞き取り調査(2019年3月)より。
 - 37 事務局プロジェクトリーダー「他では見られないものを見られる都市としてヨーロッパ世界にアイデンティティを発信するのが事務局の役割であるため、文化遺産にはあまりスポットをあてず、例えば大聖堂の前よりもパサージュなどを通るように意図している」と述べる(2019年3月聞き取り調査より)。
 - 38 欧州連合の欧州委員会環境局が主催している環境分野の表彰で、住民20万人以上のヨーロッパ全土の自治体が対象となり、毎年1都市が受賞する。2010年以来、実施されており、ナントはストックホルム(スウェーデン・2010年)、ハンブルク(ドイツ・2011年)、ビトリアガステイス(スペイン・2012年)に次いでフランスで初めて指定された都市である。
 - 39 フランスの日刊新聞Ouest France2013年1月21日の記事(<https://www.ouest-france.fr/pays-de-la-loire/nantes-44000/le-voyage-nantes-suit-la-ligne-verte-931109>)より参照。
 - 40 Gangloff(2017:346)
 - 41 ジャン・ブレーズは「洗練された観客は、線を迎らない、迎りたくない、都市で迷子になりたい、または行かないということが出来ます。観客はこれが取り組みを集合させるための提案であることをよく理解しています」と述べる(Gangloff 2017:346)。
 - 42 Cours Cambronneには2014年までは展示は行われず線が引かれるだけであったが、2015年以降展示が行われるようになった。
 - 43 PARTOUT DANS LA VILLEの配置についても公式パンフレットに掲載されているが、ナンバリング展示を迎える線が記載されている地図上ではなく、別地図に掲載されている。
 - 44 <https://www.paris-art.com/lieux/galerie-melanie-rio-nantes/> 参照。
 - 45 作品作成に参加したナント在住の彫刻家Lucile Réguerreのwebサイト(<http://www.lucilereguerre.com/Viva-Las-Vegas>)参照。
 - 46 Greffe de la Maison d'arrêtにおいて、Trickart Palaceと題したイベントが2014年11月1日、8日、15日の3日間アーティストの自己資金により、コンサート、グラフィックアートの作成、その他の展示が行われた。
 - 47 ベイ・ド・ラ・ロワール地域圏webサイト (<https://www.patrimoine.paysdelaloire.fr/actualites/tous-les-focus/detail/actualites/detail/News/lancienne-maison-darret-de-nantes/>)参照。
 - 48 La Promenade(散策路)は、歴史的、芸術的そして記念碑として注目すべき40余りの墓と墓地中央部分の公共スペースにおける彼女の作品からなる。陶芸家でもある彼女は、墓に供えられる花輪(かつては生花であったが現在は主に陶器や造花で量産されている。その多くに“Souvenir”すなわち記憶、

- 忘れ形見というメッセージが添えられている)と自然の花をモチーフに新たに「花輪」を作陶し、遺族の許可が得られた墓と、墓地中央の公共スペースに配置する。
- 49 展示はエルミタージュ通り (La rue de l'Hermitage) 沿いに設置された。
- 50 “BASCHANTENAYCarnet de chantier - Promenade des 7 belvédères et Jardin Extraordinaire –(2019年1月ナントメトロポール計画局(Nantes Métropole Aménagement)発行。
- 51 事務局プロジェクトリーダーへの聞き取り調査(2019年3月)より。
- 52 事務局プロジェクトリーダーは「場所に応じて適切なアーティストを選ぶことが重要であるため、注意は払っているが、特にナントに拠点を持つアーティストを使う義務はない」と述べる(2019年3月聞き取り調査より)。
- 53 2017年度の来訪者数が最も多い常設ではない(一時的あるいは新規の)展示はHécate(152,000人)、次いでPas de Rose pour l'Infini(95,000人)、次いで3番目がEntrez Libre(94,000人)。
- 54 PUPはプロジェクトの趣旨について、「過渡期の都市計画」の用語を用いて次のように説明している。「Transfertは『過渡期の都市計画』の文脈の一部である。大規模なZAC(自治体による協議区画整備)のPirmil-Les Isles計画に含まれる区域の建設に先立ち、土地の利用と変換を実施する。プロジェクトは文化を推進力として、将来の住民がどのように区域を使用するかを予測する。“Transfert s'inscrit dans un contexte « d'urbanisme transitoire » : l'occupation et la transformation du terrain précéder la création d'un quartier inclus dans la grande ZAC Pirmil – Les Isles. Avec la culture comme moteur, le projet participera ainsi à préfigurer et anticiper les usages des futurs habitants”](PUPwebサイトを参照 : <https://www.pickup-prod.com/projet-transfert-zone-libre-dart-de-culture-a-reze/>)。
- 55 2018年度の“Transfert”はLVAN開始同日の6月30日に始まったが、終了日はLVANの2週間後(2018年度のLVANの終了日は8月26日、Transfertの終了日は9月8日)である。2019年度については、LVANのナンバリング展示とは分けられ、メトロポールによるアート企画(Les RDV art de la metro-pole)として紹介され、開始日も異なる(2019年度のLVANの開催時期は7月6日から9月1日まで、Transfertの開催時期は5月17日から9月1日)。
- 56 LVANにおいても経路はparcoursである。2012年の緑(ピンク)の線が“Les parcours”, 2013年はナンバリング展示は“Le parcours hors centre-ville(中心市街地の通り道)”, brancheは“Le parcours en centre-ville(中心市街地の外の通り道)”と表記されている。2013年はgreen projectと合わせて同時に3つのparcoursが設定されていたことになる。
- 57 その他、ナント美術館(Musée des Beaux-arts de Nantes)は、市内の様々な場所で美術館のコレクションの作品間や作品と展示場所の間の関係を再解釈する“Musée Nomade(ノマド美術館)”(2015年・2016年)、ナント市立図書館(Bibliothèque Jacques-Demy)では屋外で快適な読書を楽しむために設計された家具を展示する“Les Chaloupes(帆掛け船)”(2015年)、“Les Chaloupes pour lire au gré du temps(帆掛け船一時のままに本を読むために)”(2016年)、アーティストを支援するためのアトリエスペースであるMilleFeuillesはアトリエの建物の屋根に言語の形式を問いかけるサインを設置する“Enseigne(サイン)”(2015年)の提案を行っている。
- 58 パリ地域研究所(l'Institut Paris Region)は過渡期の都市計画のプロジェクトにおける重要な要素として、以下の点を指摘している。「既存のコンテクストに適合し、地域社会とその住民、市民、労働者、若者、女性の地域のニーズを明らかにする」[戦略に統合され、アクター間の調整されたアクションを可能にする]「用途を事前に設定し、ニーズを特定することにより、都市プロジェクトを推進する」[横断的取り組みで、潜在的な用途を明らかにする]「固定も事前定義もされず、多様な実践、参加者、手法を模索する」[開発者や推進者が現場にいない「オフマーケット」の時間にも稼働する」(前掲15)
- 59 展示はフェイドー広場(carré Feydeau)の遊歩道に設置された。
- 60 事務局プロジェクトリーダーへのヒアリング(2019年3月)より。この建物をめぐっては市民の間でもこの地区の他の建物に似つかわしくないという意見がある。しかし建物を覆い隠す作品には「都市の不都合なもの」を隠す「隠蔽アート」「排除アート」として、その恣意性を指摘しなければならないと考える。
- 61 2016年パンフレットのステートメント参照。
- 62 2017年パンフレットのステートメント参照。
- 63 建築学位(DPEA)としてのセノグラフィ教育は1984年にクレルモン＝フェラン国立建築学校(l'École d'Architecture de Clermont-Ferrand)で設立され、1999年にENSANに移転された。セノグラフィの専門教育を行う公立学校はフランス国内に複数あるが、建築学の学位資格(DPEA)を取得できるのはENSAN1校のみである。
- 64 器用仕事人、セノグラフィ、建築、イベントの専門家、コミュニケーションの専門家、都市デザイン、都市社会学、木材の再利用と建設の専門家。“Une multiplicité de compétences et de profils sont utiles pour l'animation et la vie des sites : « bricoleuses et bricoleurs, scénographes, architectes, spécialistes de l'événementiel » (Plateau urbain), spécialistes en communication, design urbain, et urbanisme-sociologie (La Belle Friche), experts du réemploi et de la construction bois (Bellastock)”(前掲15)

文献

- ✧ 石原武政、西村幸夫 編(2010)「まちづくりを学ぶ」有斐閣ブックス
- ✧ 卯月盛夫(2019)「住民参加とまちづくり」都市社会研究第11号
- ✧ 越智郁乃(2014)芸術作品を通じた人のつながりの構築と地域

- 活性化の可能性—新潟市における芸術祭と住民活動を事例に—『アジア社会文化研究』第15号
- ✧ 越智郁乃(2019)「民俗資料としてのアート—沖縄市コザ十字路絵巻とガイドツアーを例に—」『立教大学観光学部紀要』20号

- ❖川崎修良(2013)「市街地景観制御制度と運用の研究：景観法制定以降を中心に」京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文
- ❖熊倉純子(2014)「アートプロジェクト概説」熊倉純子監修・菊池託児+長津結一郎編『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』水曜社 pp.15-29
- ❖菅野幸子(2004)「蘇るナント-都市再生への挑戦」『文化による都市の再生～欧州の事例から』国際交流基金調査報告書
- ❖西村幸夫 編著(2009)「観光まちづくり」学芸出版社
- ❖似田貝香門, 大野英俊, 小泉秀樹, 林泰義, 森反章夫 編(2008)「まちづくりの百科事典」丸善
- ❖橋爪紳也(2005)「集客都市と自治体ブランド戦略」『自治大阪』2005年12月号
- ❖堀野 正人(2016)「観光まちづくり論の変遷に関する一考察：人材育成にかかわらせて」奈良県立大学研究季報 27(2)
- ❖宮本結佳(2018)『アートと地域づくりの社会学』昭和堂
- ❖Cavé, Roger et Quimbre, Xavier (2006) “*Saint-Herblain: parcours d'une ville en mouvement*”, Ed. Cheminements, France
- ❖Freydefont, Marcel(2012)“Le département Scénographie à l'École nationale supérieure d'architecture de Nantes” Études théâtrales, No.54-55
- ❖Gangloff, Emmanuel(2017)“Quand la scénographie devient urbain: Nantes comme observatoire des fonctions du scénographe dans la fabrique de la ville”, Architecture, aménagement de l'espace. Université d'Angers, France
- ❖Guiu, Claire, et Zoé Wambergue(2012)“ Voyage à Nantes : l'art pour déployer l'urbanité?”, Géographie et cultures, no.84
- ❖Masbounji, Ariella(2012)“*Estuaire Nantes - Saint-Nazaire Écométropole mode d'emploi*”du Moniteur
- ❖Sagot-Duvaux, Dominique(2010)“La scène artistique nantaise, levier de son développement économique”, in Nantes, la Belle Eveillée, le pari de la culture (Les éditions de l'attribut, 2010).

